

| | |
|-------------|---|
| Title | 書評 Craig Bourne: A Future for Presentism (Clarendon Press, 2006, xiii+242 p.) |
| Author(s) | 佐金, 武 |
| Citation | 哲学論叢 (2008), 35: 250-253 |
| Issue Date | 2008 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/96260 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

Craig Bourne: A Future for Presentism (Clarendon Press, 2006, xiii+242 p.)

佐金 武

現在主義とは、現在だけが存在するというテーゼを支柱とする時間論における一つの立場である。著者ボーンの本書前半部におけるもっともスリリングな議論の一つは、すべての時点が等しく存在すると考える無時制理論に対してオルタナティブとなりうる唯一の時制理論は、現在主義のみだということである。

様々な時制理論の共通点は一般に、次のように整理される。第一に、時制理論は、「一は過去である(かつて一だった)」や「一は現在である(今一である)」、「一は未来である(やがて一だろう)」という時制的な区別の実在性(世界には時制によって表現されるべき事実が存在するという主張)を何らかの仕方で擁護する。第二に、この理論には、「時の流れ」というときに意図される時間の動的側面を肯定的に捉えようとする傾向も見られる。

以上のような時制理論の一般的立場に対して、無時制理論はそのアンチ・テーゼとして整理することができ、現代の時間論は大枠において、この対立構図によって成り立っているといえる。しかし、時制理論は決して一枚岩の立場などではなく、複数の

対抗理論が競合する、それ自体一つの論争の場となっている。少なくとも、以下のような三つの異なる立場が存在する。

一つ目は、ボーンの支持する「現在主義」の立場である。現在主義によると、過去に起こった出来事や未来に起こるはずの出来事は、時制つきという条件なしでは存在しないが、今起こっている出来事は、そのような留保条件なしに存在する。時制が絶対不可欠なものと思なされるのは、過去と未来に対する、現在のこの存在論的優位を見過ぎさないためである。

二つ目は、「オープン・フューチャー理論」と呼ばれる立場だ。この理論によれば、過去と現在は等しく存在するが、未来は端的に無である。過去と現在に存在論的優劣はないとはいえ、それでも現在は、存在するものと無を分かち縁にある時点として、特別な意味を付与されているといえる。

三つ目は、「現在の程度説」である。この理論においては、過去や未来の存在は否定されない。しかし、現在は完全に存在するが、過去や未来は現在からの遠さに依存して、存在の程度がより少なくなるとされる。それゆえ、現在性を付与される時点はやはり、特権的な役割を担うことになる。

このように、三つの時制理論は、現在が何らかの仕方で特別な意味をもつことを主張する点では一致しているが、複数の時点の存在を認めるか否かについては、互いに鋭く対立する見解をとっている。

さて、本書におけるボーンの第一の主張

は、複数の時点の存在を認めながら、特別な現在性なるものを指定する、現在主義以外の時制理論の立場はどれも維持できないということである。この種の時制理論はいずれも、彼が「現在をめぐる問題」と呼ぶ困難に直面するという。以下、第1章におけるこの議論を解説したい。

まず、「現在」という語の、異なる二つの使い方を区別しよう。一つは、私が「私」と発話すれば佐金を指示するのと同様に、個々の時点において使用される「今」はその時点を示すという意味での、指標的な使い方である。もう一つは、種々の時制理論が様々な仕方で保持するところの、特別な意味を担わされた「今」であり、これを指標的な使い方と区別するため、*現在*と表記する。さて、「現在をめぐる問題」は、次のことを提起する。すなわち、我々の現在が*現在*であることはいかにして保証されるのか、と。

「この現在こそが*現在*である」という発話を考えよう。昨日の私は正當にも、そのときこの発話がなされれば、それは真だと考えたはずだが、今日においては今日の私の発話こそが真だといいたい。ところが、過去と現在の時点がどちらも存在すると認めるなら、昨日の私は存在し、今日の私と同様に、そのときの発話こそが真だと信じ続けているはずだ。何らかの外在的メカニズムが働くのではない限り、二つの発話の正否を決定する手段はない。こうして、複数の時点、あるいは少なくとも過去の時点

の存在を認めつつ、特別な*現在*を指定する時制理論は、「現在をめぐる問題」に明らかな回答を与えることができない。

ところで、この問題の解消法は二つある。一つは、*現在*なるものをはっきりと否定し、「現在」の意味は指標的な意味での現在に尽きるとする解消法であり、これは無時制理論の立場に他ならない。しかし、もう一つ別の選択肢もある。特権的な*現在*を保持しつつ、等しく存在する複数の時点という考えを拒否する途であり、これは現在主義の立場である。これ以外に*現在*を保持する説得的な理論はなく、現在主義こそが、唯一維持可能な時制理論の立場だ、ボーンはそう主張する。

以上の議論を受けて、第2章では、現在主義の理論的定式化が試みられる。ボーンは、自らの提唱する現在主義を「代用現在主義 (ersatz presentism)」と呼ぶ。さて、現在主義一般にとって急務の課題は、過去や未来が存在しないとすれば、過去言明や未来言明の真理性をどのようにして救うことができるかという問題に取り組むことである。(現在についての言明は、現在存在する事実によって真偽が与えられるので、問題を生じさせない。) 以下、ボーンの代用現在主義を概観し、この理論が上の課題をどう処理するのかを見てみよう。

まず、代用現在主義において、諸々の時点は、過去時制や未来時制を伴わない、裸の現在時制の命題からなる極大無矛盾集合として構成される。このようにして構成さ

れる時点は、無時制理論の立場とは異なり、実在的な存在物とは見なされない。むしろそれらは、抽象的な存在物として扱われ、具体的に実現されている現在とは存在論的に異なるとされる。したがって、ボーンは、現在だけが存在するという現在主義の中心的テーゼを、他の時点は抽象物としてのみ与えられるが、現在だけが具体的に実現されていると読み替えるのである。

繰り返すが、代用現在主義にとって時点は抽象物にすぎない。そして、この非時空的な抽象物の間の関係として、数的順序をスケールに用いた、括弧付きの「前後関係」が導入される。これは、出来事間の「より前・より後」という時間的な関係を表象するものとして導入されるけれども、ボーンの立場からすると、過去や未来の出来事は具体的に実現されてはいないのだから、その関係は文字どおりの時間的な前後関係ではない。あくまでそれは、抽象物としての時点の間に成り立つ数的順序である。

さて、代用現在主義においては、過去言明や未来言明を真にする事実、上のような抽象物からの集合論的な模造により与えられる。「 p だった」という過去言明が真であるのは、現在真である命題の集合と、現実的に「より前」と関係づけられた命題の集合に現在時制の命題 p が含まれているときかつそのときに限る、という仕方で説明される。同様にして、「 q だろう」という未来言明が真であるのは、現在真である命題の集合と、現実的に「より後」と関係づけ

られた命題の集合に現在時制の命題 q が含まれているときである。

さらにボーンは、これらの装置を利用することで時間の分岐モデルを構成することができ、これにより過去と未来の非対称性を捉えることができると示唆する。このモデルを前提すれば、過去から現在までの時点は、現実的な前後関係によって線型的に模造され、それにより過去言明は確定的な真理値を与えられる。これに対し、未来には複数の可能性があり、そのどれが現在の時点と現実的により後という関係にあるのかは特定されない。現在からの可能な分岐におけるすべての時点（命題の集合）に現在時制の命題 q が含まれているのではない限り、「 q だろう」という未来言明は確定的な真理値をもたず、現実の成り行きに依存する、偶然的な言明ということになる。

このような理論的定式化を与えた後に、第3章においてボーンは、現在主義の困難としてしばしば指摘される哲学的諸問題に対する応答を試みている。このなかには、たとえば、マクタガートのパラドックス、偶然的な未来言明の不確定さを扱う三値論理の批判的洗練、ラッセルやクリプキを下敷きとする指示の問題などが含まれる。

第4章では、クリプキ流の指示の因果説の背景をなす、時点をまたぐ因果関係一般が考察される。ここでボーンは、主要な因果の理論として、規則性説、反事実的条件法による分析、原因を結果の確率上昇に影響するものとして捉える立場の三つを挙げ、

そのどれもが現在主義の枠組みで定式化できることを示す。

ボーンの示唆するところでは、これまで論じられてきた諸問題に関する限り、無時制理論と代用現在主義は、対等な理論的立場と見なしうる。しかし、二つの立場の根本的な世界観の違いが明らかになるのは、現代物理学においてであり、このことが本書後半部の中心的テーマとなっている。

第5章では、ニュートン力学から現代物理学までの重要な概念が手短かに説明される。これを踏まえ第6章では、特権的な*現在*の問題と特殊相対性理論の緊張関係が論じられる。特殊相対性理論によれば、空間的に隔たった二つの出来事の間に成り立つ「絶対的な同時性」など見出すことはできず、参照枠と相対的な現在しか重要性をもたない。このことを深刻に受け止めたとき、存在論的に特権化された*現在*なるものを指定する現在主義の立場は維持可能かどうか。ボーンの診断はこうだ。特殊相対性理論にしたがえば確かに、どの出来事が我々の現在と絶対的に同時といえるのかを我々は知り得ない。しかし、そのことは、我々の現在が*現在*であることを我々が知り得ないということを意味しないのだ、と。

第7章のテーマは、一般相対性理論と膨張説に基づく宇宙時間である。時制理論の多くの支持者は、この宇宙時間という概念により、「時の流れ」が有意味に理解可能になると考えてきた。しかし、ボーンによれば、これは誤解である。第一に、宇宙時間

の概念は非常に広大であり、これが我々の日常的な時間概念を形成する、現象学的な局所性とどのような関係にあるのか、またそもそもそのような関係がありうるのかということさえ明らかではない。

第二に、宇宙時間における同時性は、宇宙の一様性（物質の密度と圧力が同じであること）によって定義されるが、このことから必ずしも、宇宙の膨張にしたがって時間が経過することは帰結しない。縮小する宇宙を考えた場合、膨張説に基づく時間のダイナミズムの擁護者は、そこでは時間は逆向きに経過するといわねばならないか、そのような宇宙論的可能性をアприオリに排除することになってしまうだろう。

以上の議論と関連して、第8章では、ゲーデルの閉じた時空モデルが取り上げられる。このモデルにおいては、時間の経過は、物理的プロセスと同一視することができず、*現在*も存在しえない。もし仮に世界がこのようなゲーデル的時空を許容するとすれば、現在主義を含む時制理論の立場は維持することが難しい。これは、多分にショッキングな結論だ。もっとも、そのような時空が本当に存在するかどうかは定かではない。しかし、ゲーデル的時空が存在するかどうかは経験的問題であることを認めるとき、時制的な区別、とりわけ*現在*は、時間概念のアприオリな特徴ではないことになる。そのとき、*現在*はどのような意義をもつことになるのか。この問いに対するボーンの答えは、本書を見て欲しい。